

照千一隅

周 郷 博

私の小宇宙—ささやかな「野菜畑」で働いて、「土遊び」をして）いて、私は「何冊ものりっぱな本を「読んだ」以上のことを「知り」「学んで」いる。私は、自分でもわざわざ「畑気がいい」「百姓気がいい」というようにわざわざ自分を世間に「自己紹介」したりしてきたが、しかし、人（世間）は私の言おうとしていることを「けっして」わかってはくれないだろう、ということも、よく承知している。

それでも、私のこの「山羊の家」そうして私の、この「小宇宙」をつうじて、私が、いま、人々は、学歴や肩書や、「世間的カッコよさ」「金力や知識、権力」によって「生きる」という情性に自分を「任して」生きていていいわけではないんだ、人間はいま（そうして「これから」）地球の上はどう「住む」かですよ。——という声に、「涙を

流して」そうして「私こそ先生の「信者」第一号」と言つて、この夏の初めに、丹沢の養毛やうもうに、ドイツ文学をやった夫と二人で、百姓をしながら「生きて」いる橋本フニさんという人が、自分でつくった玉ねぎと、近くの川で捕ったニジマスなどを持って訪ねてきた。私のところへ来たい——「渋沢自然教会」で労働礼拝をしに行きたい、と言ってくる人は、橋本フニさんだけではないのだが、このフニさんという人との「出会い」は、私もうれしくて「友あり……」という思いが深かった。その四十過ぎた、ちょうど戸倉ハルさんにどこか似た、太って美しい人（妙な「縁」！）——芸術舞踊をやってきた、という！それも自分を売り出すためとはなんのかかわりもない「ただ赤ちゃんのような澄んだ目で一生をすごしたい」ということだけが「舞踊」に打ちこんだただ一つの理由——という人。

地球の上にどう生きるか—どう住むか。「原子力時代のつぎに来る時代は、燧石ひろうしの時代だ」(自然と人間が過不足なく「遊び」に似た十全な「労働」によって「結びつけられている」時代だ、という意味に私はとる)と言ったアインシュタインの言葉にも、どこか一脈通うものがある。

私のこの「小宇宙」。それは、附属幼稚園での「挫折」感も背後にあつて、私は、それが私の作物たちを相手にした「保育園」「幼稚園」であるようにも、ときどきフト感じる。——が、どうしていまの日本人は、小さな子まで、私のように「土遊び」「水遊び」をしないのか。私はときどき、「私が子どもで」「子どもたち」は「老後を楽しんでいる大人」かも知れない、という不安(逆さま)に気味わるさ、身ぶるいを感じる。

たまたま、伝教大師、最澄の「一隅を照らす」という「山家学生式」(日本の教育らしいものの出発を成すもの)のことばが問題になっている。「やみを照らす光となって生きよ」というように最澄のことばは「教説」ふうに伝えられてきた、が、それは誤読で「照千一隅」(「照千一隅」ではない)つまり「千(全体)を照らす(照り映える)」(い

とさきやかな「一隅」という意味になつてくるのだ。そういつた「一隅」である「小宇宙」そうして「幼稚園」「保育園」は、どこにあるのか。おセンチも「物知り」ぶつた「説明」「説教」も、ここにはなんの関係もないのだ……。

「照千・一隅」なんと中国の思想は「大きい」か。「照千(万般・全体 *all that* と照り映える)」と「一隅」とが対応している——「千を照らす一隅」……「千」「千」に読みちがえた、ということだけのことでなく、日本人(昔の人はいまの日本人とはくらべものにならぬほどよいものをもつていたが——)はそれを単に「一隅を照らす」人という「小じんまりした(あきらめに近い)」「人生訓みたいなものにして今まで来てしまった。権力者の手にそれがはいつて使われれば「人民—民衆支配の道具化」も生じる。なんと大きなコスミックな世界観、生存観であろう。「照千一隅」——そんな幼稚園、保育園をこそ、私は「かぎりなく」望んでやまない。(みどり会便りより)